

日本における 1920 年代の マルクス主義興隆の要因 (日本マルクス経済学史Ⅳ)

——『左傾学生生徒の手記』を中心として——

深澤 竜人

【要旨】

本稿は 1920 年代後半において日本にマルクス主義・マルクス経済学が興隆した、その状況と要因に関して、『左傾学生生徒の手記』から検討した。当時の時代的背景や日本経済の状況、マルクス主義・経済学が持つ理論的特徴、日本経済に関する分析能力、分析結果に対する耳目の集まり、これらが要因となっていたことを提示する。

【キーワード】 1920 年代後半, マルクス主義, マルクス経済学, 『左傾学生生徒の手記』

はじめに

1920 年代になると日本において非常にマルクス主義が興隆してきた。特に 1920 年代の後半から 1930 年代の前半は、戦前の日本でマルクス主義が隆盛を極めた時期と言ってもよいであろう。この点を鑑みて本稿では、この時期なぜマルクス主義が大衆をとらえたのか、その要因はどこにあったのか、あるいは逆に大衆は

マルクス主義のいかなるところに魅力を感じ引き付けられていったのか、これらの内実を追究していきたいと考える。

そうした要因あるいは理由に関しては、関係者各人によって無論様々であろう。また個人的な要因・理由の他に、時代状況や歴史的要因等々も加味されるところでもあろう。しかし、大きく共通するような要因・理由を把握していくことは可能ではないかと、筆者は考えている。この時代の状況・歴史的な背景とも合わせて、いかなる点でマルクス主義は興隆していったのか、その要因として大きく共通するものは何か、これらを探り追究していくこととしたい。

本稿での対象時期は1920年代の後半としておく。これ以前の時期において、上記と同様な課題設定で追究してきたものとしては、深澤(2018, 2019a, b)での提示があり、本稿はその継続編ともなる。ただ以下で示していくように、新たに全く別な史料を用いて追究し考察していく。その史料の詳解と合わせて、まずは当時の時代背景から再確認していくのがよいであろう。

1. 時代背景と史料詳解、そして本稿での取り扱い方法

1-1. 時代背景

マルクス主義が日本に導入され出すその端緒は、1900年代の初め頃に求められる。その当時マルクス主義は、社会主義思想と同時に導入・紹介され出したのであるが、1910年の大逆事件によってそれは頓挫し、社会主義全般にとっては一時期いわゆる「冬の時代」を迎える。それをいわば溶かし、再びマルクス主義が導入され興隆してくるのは、大正デモクラシーの時期である。1910年代の特に後半(大正4年～)から、マルクス主義・マルクス経済学の導入が再び活発となり、それらに関する翻訳も盛んに行なわれ出した。ここからが上記の黎明期的とも言うべき端緒的導入を踏まえた上での、本格的な導入と言ってよい。

特に1920年代(大正9年～)になると、単なる紹介や翻訳といった導入から、特にマルクス経済学の諸問題について、すでにいくつかの論争(「崩壊論争・再生産論争・資本蓄積論争」「価値論争」「地代論争」)が行なわれ出す。さらに1920

年代の後半になると、マルクス主義・マルクス経済学を基にした日本経済・日本資本主義に関する研究と、その分析成果が示されてくる。(これが重要であり、本稿の3で詳しく触れていく。)これに関して甲論乙駁の論争が、主に1930年代に「日本資本主義論争」として展開されていったところである¹。

このような日本におけるマルクス主義の興隆、その要因を探ることが本稿の対象課題であるが、ひとまず当時の時代背景や概括的要因を示しておくとするば、時代背景としてはロシア革命(1917年)の影響、また当時日本経済の様々な問題が影響していた。これらのことは後述の本稿2・3で詳細に確認されていく。

ただ上述の学術的な側面とは別に、マルクス主義は自身の学術的分析を基にした主張の中に、官権あるいは体制側と辛辣な軋轢を生じさせていく問題があった。マルクス主義は理論展開上、資本主義制度での矛盾の展開からその崩壊、あるいは革命による制度・政権の打倒、そしてプロレタリアートの独裁、さらには社会主義・共産主義制度の建設と、このような視点あるいは論述そして主張を持ち合わせており、さらにその現実的な実践と運動が当時実際転々と展開されてきたわけである。特に労働運動・農民運動の面で。

そして日本でもマルクス・レーニン主義に基づく日本共産党が、コミンテルンの支部として1922年7月に創設・結成され、(1923年6月に第一次共産党事件、1924年2月に解党決議、1926年6月に再建)上述の特に実践運動の面で先頭的役割を果たしていた。その当時の日本共産党の「1922年テーゼ」や「1927年テーゼ(日本問題に関する決議)」を確認していくと、「18歳以上のすべての男女に対する普通選挙権」「労働者の団結・出版・集会・示威運動の自由、8時間労働制」「労働組合の公認」「最低賃金の設定」等々、これらは今からすれば当然のものとして実現されているものであるが、この他に「君主制の廃止」「労働者の武装」「天皇・大地主・寺社の土地の無償没収とその国有」と、こうした要求も行っていた²。特に後半の要求をもって、官権側はマルクス主義=共産主義思想=

¹ これら日本におけるマルクス主義・マルクス経済学の導入に関しては、深澤(2018, 2019a, b)を参照。またその中で展開された「価値論争」「地代論争」に関しては、深澤(2020a, b, c)を参照。

² 「二二テーゼ」33頁以降、「日本問題に関する決議」95頁。なお引用では伏せ字のない

危険思想として、弾圧の対象とした。上記のようにマルクス主義が興隆すればするほど、その弾圧のほども以下見るようにまた強くなっていく関係にあったわけである。

その弾圧(当時の言葉で言えば「白色テロル」)、これが本稿の内容と大いに関係するので、そのいくつかを例証し再確認しておくとするれば、1925年4月治安維持法の公布、1928年3月三・一五事件、同年6月治安維持法の改正(最高刑として死刑・無期懲役を追加)、同年7月すべての県に特高課を新設、1929年3月山本宣治の刺殺事件、同年4月四・一六事件、これらが有名なものである。(さらにこの後の1930年代になると、戦時経済、ナショナリズムの高揚、ファシズム、これらによってマルクス主義・共産主義思想への弾圧はさらに激化するのであるが、それは本稿での対象時期外となるため省略しておく。)ただこれらの事件は逆に、当時のいわゆる左翼思想に一定の影響を与えたことが、後述の本稿2において明瞭である。上述のようにマルクス主義が興隆するため、その弾圧が強くなったのであるが、そうした弾圧は逆に、マルクス主義へのさらなる興味・関心を呼ぶという反作用をもたらした。

しかし官権側からすれば、上記のように現体制の打倒の旗頭でその理論的中心として先導し扇動する役割を持つマルクス主義は、抑え込まなければならない。このような危機感と要請から、思想を含めた取締りが上述の他いっそう強くなっていった。その詳細は節を改めて以下の「史料詳解」で触れていくとして、こうした時代背景の中、思想問題に関し学生・生徒の指導監督の任にあたる者、その他教育関係者の執務上の参考に資する目的をもって、官権側から編纂され発行されたのが、本稿以下で取り上げる『左傾学生生徒の手記』(以下「本史料」とも略記)であった³。

「二二テーゼ」からのものを用いた。そこに記されている「労働者の武装」等々は原文のまま引用したが、これらの内容に関しては正確な理解が必要である。この点について、山辺(1964)34頁以降の「註」を参照。

³ 「本輯は思想問題に関し学生生徒の指導監督の任にある者其他教育関係者の執務上の参考に資する目的を以て編纂したるものなり」(文部省学生部・思想局〔1934-1935〕第一〜三輯の冒頭。)

1-2. 史料詳解

既述の時代的推移や対立関係を基にして、官権側は危機意識とその弾圧「白色テロル」のほどを強め実行した。その中でも関係者を大量に収監したものと知られているのは、既述の中でも1928年3月の三・一五事件と1929年4月の四・一六事件である。両事件は一般的・簡略的には、事件日当日における共産党員の全国的な大検挙として理解・把握されている。しかしそうした弾圧と検挙は、実はこれにとどまらなかった。

本史料を見ていくと、上記に付随しながら、さらにそれにとどまらず、以下のことが解る。学生に対しても、既述の「1929年の共産党関係の事件」に関与した学生が、まず起訴・収監されていった。またそれ以後も、本史料では「某地方」としか記されてなく詳細は不明だが、1930年に学生事件が起り、それに関与した学生・生徒等で治安維持法違反に該当する者、さらに学内で左傾思想事件に関与した者までを検挙し収監して、取り調べを行なっている⁴。

さらに・さらに弾圧のほどは強められていく。上記共産党関係事件、学生事件、そして左傾運動や思想に関与した者、彼等の検挙・収監、これらにとどまらず、本史料を見ると、「1931年某大学において読書会を中心とする左翼団体事件の関係学生」、「1930年某思想事件で家庭謹慎を命じられた高等学校生徒」、「1930年某高等学校における盟休事件に関係し処分を受けた左傾学生」、「1930年某専門学校において発覚した社会科学研究所組織事件に関与した生徒」等々、これらに関与して検挙され収監された者も多数見られる⁵。このように、何と読書会・思想・盟休(ストライキ)・社会科学研究所の組織まで、これらに関与した左翼思想を持つ学生を、左傾学生として検挙・収監したのであって、官権側はそこまで弾圧の対象を強めたことが知られる。

このように多くの関係学生・生徒を検挙・収監し、取り調べ、その取り調べの際、執筆を記録したのが、本稿で扱う『左傾学生生徒の手記』である⁶。(取り調

⁴ 文部省学生部(1934)第一輯, 1, 13, 34, 64, 84, 221, 299, 319頁。

⁵ 同上, 209, 301, 304, 309, 354, 364, 369, 451頁。

⁶ 「本輯は治安維持法違反事件及び学校内左傾思想事件に関与したる学生生徒及び少数の卒業生、退学生等の手記を輯録せるものなり」(同上の凡例より)。

べの内容と執筆の内容に関しては後述。)取り調べられ手記を残した学生・生徒、つまりは本史料に掲載されている者は、総勢286名におよぶ。そして以上のような時代背景と経緯の中、この『左傾学生生徒の手記』が既述の趣旨をもって1934年～1935年に文部省から編集・刊行、さらに特定機関に送られた次第である。

さらにその刊行と配布に際しては、当時マル秘資料として刊行された。現在では1991年に復刻版が新興出版社から刊行されており、我々はその閲覧が可能であるが、その復刻版にも記されているように、原本は当時マル秘資料(同書の土屋基規氏の「解説」では「極秘の内部資料」⁷⁾)という性格から、特定関係機関にのみ配布され、一般国民が閲覧購読することはできなかったようである。

学生・生徒への取り調べ内容はいろいろであるが、以下本稿の2で取り上げる者に対してはほぼ共通している。文面・表現についていささかの異同はあるが、ほぼ共通した次の質問が収監学生・生徒に投げかけられ、それに対して彼らが答える形で手記を残し、それが収録・編集されているのである。

所属・家族・父兄の職業・貧富の程度・学資・健康状態・性質

一、マルクス主義を研究するに至りし動機事情如何。

二、マルクス主義(共産主義)に対して如何なる考えを持っているか。

三、日本共産党、日本共産青年同盟に対し如何なる考えを持っているか。特に、

(イ)君主制の撤廃 (ロ)土地没収 のスローガン。

四、学生左翼運動に対して如何なる考えを持っているか。

五、これまで如何なる意識の下に左翼的運動をして来たか。

六、今後は如何なる方針で進まんとするか。

(イ)思想的 (ロ)行動的

このように、取り調べと同時に、最終的には自己批判や改心を迫り、更生を促すような内容となっていることが解る。(この点に関しては史料分析上注意を要す

⁷ 土屋(1991)「解説」6頁。

るところであるが、それは次節で触れていく.)

1-3. 本稿での検討方法

以上が本史料の詳解等々であり、ここから最初に述べた本稿の課題対象と突き合わせていこう。先に本稿「はじめに」で示した課題対象として、1920 年代後半におけるマルクス主義興隆の要因の追究、具体的にはなぜこの時期マルクス主義が大衆をとらえたのか、その要因はどこにあったのか、逆に大衆はマルクス主義のいかなるところに魅力を感じ引き付けられていったのか、これらの内実の追究、その要因として大きく共通するものは何か、これらを設定した。

本史料『左傾学生生徒の手記』にて示されている学生・生徒は、ちょうど本稿で対象とする時期 1920 年代後半にマルクス主義に入っていったわけである。そして繰り返すが、官権側に検挙・収監され、そこで取り調べられ、手記にて示した内容は、上記のとおり「一、マルクス主義を研究するに至りし動機事情如何。二、マルクス主義(共産主義)に対して如何なる考えを持っているか。」であった。本稿での上記の課題を進めていく上では、うってつけの史料となる。これが本稿上記の課題に対して、本史料を用い依拠していく最たる理由である。

そこで本史料を用いていく上での注意事項について、先に触れておく必要がある。概括的な注意事項として、社会運動史・教育運動史の研究においては、運動団体の機関紙などを第一義的な基本史料とみなし、関係者の証言による検証と調査を重要視するところである。が、本史料は第二義的に重要視されるべき補助的ないわゆる「官側史料」である点、そこでこの「官側史料」という性格からすると、学生自身の自由な意思によるものと見なすことはできず、背後に権力的な弾圧を感じさせる点があること、誤植等々の単純な誤りもある点、等々の指摘がなされている⁸。

ただ同時に、本史料に対して以下の高評価も下されている。社会運動史・教育運動史研究では、検証と追跡調査によって運動当事者の証言を確認していくことが、科学的研究上欠くことのできない必要条件の一つである。このことから本史

⁸ 新興出版社編集部 (1991) 2, 7, 14 頁。

料での各手記を通じて、当時の学生が社会科学の研究に参加した動機がかなりよく解り、個性的にそれが語られ、多様な関わり方を通して、普遍的な要因を見出すことができる。こうした指摘である⁹。筆者(深澤)としてはここを重要視した。

また前節末尾に触れたように、本史料は取り調べと同時に最終的には自己批判や改心を迫り、更生を促すような内容となっていることも、注意を要するところであろう。しかし、次章で見ると、そうした自己批判を行なっている手記も当然見られはするが、全くそうした自己批判を行わず、逆にマルクス主義の正当性をあくまでも貫いている手記が多く見られる。上記注意事項は実際に手記を検討した上での判断となろう。

本史料は全三輯にわたり、手記の総数は286名、総頁数は各頁上下段組で1300頁弱である。到底全文掲載とはいかず、本稿では次の方法を採用していくこととする。本稿42頁で掲載した質問に答えている者に限定し総勢72名に絞っていき、さらに扱う質問内容つまり手記の内容も、本稿42頁で示した「一・二」に限定しておくこととする。これで上記示した対象課題には十分迫っていくことができよう。ただそれでも、手記の全文を掲載することはとてもできない。そのため、各人の手記の中で重要と思われる箇所を引用して、その後検討を加えるという方法を探らざるを得ない。引用者(深澤)の主観によって重要か否かが判断されてくるといふ批判が下されるのはやむを得ないことではあるが、上記の理由からしてなるべく私心を捨てて公正な判断による引用に努めたことは言うまでもない。

以上の了解事項を基にしてしたためたのが、次章での記載である。

2. 左傾学生・生徒の手記(抄録)

上記のとおり、本史料に収録された手記の総数は286名であるが、既述の72名に限定した。各学生・生徒には番号(8~45, 50~70, 76~88で72名)がふられており、以下の引用ではその番号を用いた。さらにその枝番号1・2は本稿42

⁹ 新興出版社編集部(1991)2, 14頁。

頁の取り調べ質問・手記の一・二にあたる¹⁰。

2-1.

次に掲げる三十八篇は、昭和五年〔1930年〕某地方に於ける学生事件にて検挙され起訴猶予処分に附せられたものが、取調の際執筆したものなり。

- 8-1. 人道主義的な立場より社会的矛盾なるものを痛感して悩んでいた。河上肇博士の『社会問題管見』『貧乏物語』の二書を読んで、文章及び内容に引き付けられて、爾來博士の著書を渉読したのが研究を始めた動機である。
- 8-2. マルクスの社会観・世界観は、過去の種々の社会制度（原始共産制から封建制、資本主義制度）は、それ自身社会の進化発展の必然的存在で、現代において資本主義を維持することは社会発展の妨害、社会を退歩させる、次に必然的に来るものは共産制社会であり、それを実現し得るものは労働者農民によるプロレタリア革命で、プロレタリアの独裁が必要というもの。
- 9-1. 高校生当時、日本の労働運動の勃興期で、高校においてマルクス主義の研究が盛んで、その周囲の事情に刺激された。
- 9-2. 現在の資本主義経済の運動法則を説明する最も優れた理論である。現存の資本主義の経済運動はこの運動法則の必然的結果であり、共産主義社会の将来を予想し得る。
- 10-1. 農民の生活状態を知っていて、常に朝早くから晩遅くまで働いているのに、人間らしい生活ができないことを不思議に思っていた。社会のあらゆる矛盾が一つの社会の基本的矛盾（本質的には資本と労賃）から発生していることを把握することが出来るようになった。
- 10-2. 正当な科学であると思考している。現象形態にとらわれずに、事物の本質を弁証法的に、即ち対立的に考察するが故に、最も客観的で批判的ある。現在の科学のうちで、最も優越した批判的科学である。かかる理論は河上肇の『経

¹⁰ 以下、文部省学生部（1934）第一輯，84頁-208頁，221-299頁，319-354頁。なお引用に際しては、なるべく原文を尊重したが、誤字を修正し、旧漢字を当用漢字に改め、また読みやすい表記に改めた箇所もある。

『経済学大綱』『マルクス主義経済学、資本論入門』、ブハーリンの『史的唯物論』『共産主義のABC』、マルクスの『賃労働と資本』から主に把握した。階級闘争を経て、明日の社会を創造する新興の想像力を有するプロレタリアートの将来を明らかにし、如何にして階級闘争を敢行すべきかの理論を明示している。かくの如く根本的に社会現象を批判する理論は他にない。

- 11-1. 友人の勧めで社会科学研究会に入った。社会科学の関心が大学一年の時、少しあった。
- 11-2. 労働者の地位向上のためになる。労働者の悲惨な生活を記したところには注目すべきだが、暴力を以てすべてを解決することには感心できない。
- 12-1. 高等学校二年、初めてマルクスを読んだ。理論の精緻がとともヴィヴィッドに私の若い頭に刺激を与えた。ただお金があるということ、そのことだけが何故に人格上の差別をも生じるのか、理論的に満足させてくれるのはマルクスであった。ペダンチックな理論構成癖が私を他愛もなくマルクスに走らせた。社会の事象が——橋の下で土管の中で雨露を凌ぐ哀れな人々と、帝国ホテルのシャンデリアの輝きにシャンパンをあおっている人々との対立——私をマルクスに走らせた。
- 12-2. 最もひかれるのはその論理の透徹することと、その理論構成が極めて哲学的であることである。殊にその方法論に至っては、今までの哲学の総合的最高水準として敬服している。理論に関する限り、殊に哲学的方法論の問題としては強大なる力を持つ。しかし、それが現実との関連において把握されるためには、なお幾多考えるべき余地がある。
- 13-1. 友人に勧められ、研究会に入ってマルクス主義の理論的な研究をしてみたと思った。
- 13-2. 現代の資本主義社会には幾多の欠点があり、社会的な矛盾が含まれている。これらの問題に何らかの解決を見出さなければならない。マルクス主義はこれら現代の社会的矛盾を克服せんとする一つの理想である。
- 14-1. 初めはただ好奇心から社会科学の一般知識くらいを知ることは、現代の墮落し腐敗せる学生より一步進捗したことであり、それが有意義に学生生活を送り、ひいては社会の状態を一層明確に知ることができると思った。

- 14-2. 時代とともに益々労働者・資本家の相違が甚だしくなっていくことは事実である。生産機関の中心である労働者・農民の主権の下に立派な国ができるなら、今よりも一層経済的より来る見苦しい闘争がなくなる。それ故にマルクス主義はある程度正しいのではないか。
- 15-1. 現在の朝鮮が日韓併合後に政治的には何らの権利なく、経済的には日に衰退し、加うるに総督官吏の無謀なる弾圧と、日本内地より移住せる資本家及び半官半民の金融機関の直接的・間接的搾取によって一般の民衆が貧窮して行く現象を見た場合、また私の一家の経済的破滅の経過よりして、その貧困の体験は益々深刻化していった。朝鮮において中産階級の急速なる没落と農村の疲弊、満州・シベリア・日本等に職を求めて毎年流浪する幾十万の貧困大衆を見た時、私は現在資本主義組織を批判究明したくなった。高等学校時代になって益々鋭くなり、当時より日本を風靡しつつある新興科学たるマルキシズムに興味を持ち、爾来その研究をしてきた。
- 15-2. 学術的にまた科学的にはその真理たるを疑わない。
- 16-1. 級友の活発な討論を聞いて、皆が非常に元気なのが羨ましく、彼らが次々と問題を惹起するのが大部左翼的な立場から説かれているので、私もマルクス主義を研究しないと級友の云うことが解らず、自分一人が取り除けられる気持ちが出て、少しでもよいから読みたいと思った。友人から書籍を借りたり指図してもらったりして、個人的に研究を始めた。
- 16-2. 弁証法的唯物論には正しい部分が多分にあるように思う。しかし批判的に読みたいと思って、できるだけ批判的・反省的な態度を取ってきた。将来もこの態度を取りたい。
- 17-1. 芸術至上主義的態度を保持してきた。今の社会の客観的状況はどうであるか、その客観的な確実の把握こそ芸術の真の姿を現出する第一のモメントであると考えた。それがマルクス主義研究の動機だった。
- 17-2. 資本主義社会の欠陥を指摘し、資本主義社会を構成する根本の生産力が労働者・農民である以上、資本主義社会に代わるものは労働者・農民であると理論的に正しく進めたマルクス主義は正しいと思う。共産主義こそ労働者・農民を解放するための自由の日を与える。

- 18-1. 三つに分けられる。(イ)大学の講義などからマルクス主義の流入を知る。(ロ)マルクス主義に関する本を読むようになり、だんだんと入っていった。(ハ)二年前からマルクス主義は流行の如く社会一般の関心に引き入れられる様になり、殊にここ一年くらいにおいては殆ど最高潮に達して、階級の対立、貧富の差が甚だしくなってきたこと。
- 18-2. 哲学・経済学・社会学を総合し、宗教を否定し、しかも宗教をもその中に含んでいる一つの偉大な体系だ。次の二つの特徴に注意を向けた。歴史はチグハグのものでなく、奥に一つの根本的なものが働いていること。一つとして永久的なものはないこと。また、明日にも困る人が沢山あり、一方あり余った富を何に使用としても使いきれず遊んでいてもドシドシと富んでいく人の存在を知り、多くの失業群・不景気・職業紹介所の満員を知った。更に、この世の対立・差別・犯罪・女子の奴隷化・淫売等の社会現象は、結局社会の経済的対立より来ること、マルクス主義がこれより人間を解放して一つの新しい対立のない社会に導くものであることを知った。
- 19-1. 社会主義的経済学者河上肇の著書を読んで、同級生から社会科学研究会のことを聞き、研究会に入会した。
- 19-2. マルクス主義の如何なる点を取るかと言えば、全無産大衆の生活向上のために有効であると思われる現在の実践方法を教える点、具体的には無産大衆の階級意識を啓発し無産大衆の強固な団結を教え、無産大衆が自己の利益を主張する際には全体が一組織となつてなすべしと強示する点である。マルクス主義の共産制社会建設の主張は現代社会の進展に伴い、その中より必然的に何らかの姿で実現すると思う。
- 20-1. 新たに興ったマルクス主義の哲学は従来の哲学を根本的に否定し、しかもより一層大きな体系を有していると主張し、大きな勢力を持っている。これは大きな脅威であり、研究に着手した。
- 20-2. 哲学的方面において実践物質社会的存在を取り入れた点や、経済学的方面における資本主義社会の経済学的分析に対して、多大な真理を認めざるを得ない。しかし理想とする搾取なき社会、共産主義運に対しては疑問を持っている。
- 21-1. マルクス主義文学論が盛んに問題になり、ほとんどいかなる雑誌にも月々

問題にされ、新興文学論として私の注意を引いた。次第に一面の真理を持っていることを認識した。

- 21-2. 多数の労働者・農民、就職難、不安な生活を救う、すなわち勤労階級の生活を保障するというマルクス主義に対しては賛意を有している。また理論的に言って少なくとも一面の真理を持っている。勤労階級がこのまま抑圧された生活に満足せず、否その苦しさに耐え切れず立ち上がざるを得ない時、彼等の約束に一点の光を与えるマルキシズムが、彼らに受け入れられるのも無理のないこと。
- 22-1. 思想的には全然マルクス主義の影響の下にはなく、むしろ反動的色彩を多分に持っていた。高等学校での抗争で退学を強制された。この事件を契機として、思想的動揺は反動的色彩を一掃して、漸次マルクス主義的傾向にまで進んでいき、研究を始めた。
- 22-2. ちょうど今まで漠然と感じていた影に形を与えられた様感じた。現在マルクス主義の理論を真理として受け入れている。従ってマルクス主義の説く様な共産社会の建設も、時日の問題は問わず、必然的に来るものと考えられる。
- 23-1. 同級生が社会科学を研究しているという理由によって無理に退学させられた。これに対して極度に憤慨し、かつ彼等の擁護運動を通じて当時の左翼的傾向を持った学生に接近していき、漸次マルクス主義の研究を始めた。当時読んだブハーリンの唯物史観は非常なる感銘を与えた。
- 23-2. マルクス主義理論によって指導される共産主義運動は、結局において勝利を占めるであろうし、かくて究極において共産主義社会は実現されるであろうことを確信している。
- 24-1. 娼妓解放問題が全国的に喧しくなり、それに刺激されて社会問題に興味を持つようになり、その方面に関する文献を読むようになり、次第にマルクス主義の文献を読むようになった。大学での勧誘により社会科学研究会に入り、マルクス主義の研究をするようになり、研究を続けている。
- 24-2. マルクス主義は理論的に見て正当なものである。人生観上正しい観方の方法を提供している。マルクス主義研究方法を採ってのみ初めて社会及び自然に対する正当なる認識に達することができる。マルクス主義によってのみ社会の

諸問題も解決される。

- 25-1. 大学に入学して経済学部に着いて、××[伏せ字]博士の経済原論を聴くに及んで、マルクス主義経済学を徹底的に研究せんとする希望を有するに至った。ブルジョア経済学が全く科学として無価値、無気力なるを知って、益々マルクス経済学の正当性を確信するに至った。先鋭化していく資本主義の矛盾、加わりゆくファッション化の過程に抗して勇敢に闘争していくプロレタリアの力が、自分の様な弱いインテリゲンチヤにとっては、没落していく自己の階級、小ブル階級の一員にとって真に力強いものに見えた。
- 25-2. マルクス主義(共産主義)が描いている未来の社会の見取り図は、人類の最高究極の理想であり、搾取のない自由平等平和の社会である。マルクス主義が他の何れのものよりも自己を区別し、自己の正当性を歴史の必然として強要するのは、その唯物弁証法によって把握された社会観・歴史観である。唯物史観を以て人類の社会的発展の法則とするからである。マルクス主義の一般的理論に対しては無条件にその正当性を確信するが、その一般的抽象的な原則から次第に下降して特殊化せられ、具体化せられたるものについては、無条件にそれを受け入れることはできない。
- 26-1. 芸術の研究が社会科学の研究の動機を作った。当時プロレタリア芸術は太陽の如く輝き始めようとしていた時。その頃河上博士の『資本論入門』『階級闘争の必然性とその転化』等を読んだ。何れも社会に対する新しい眼が開けた思いで読んだと記憶する。今まで一向に注意を払わなかった種々の社会の出来事が、私に関心され始めた。もう少し勉強しようと思い、いわゆる赤い本を読み始めるに至り、私の思想も赤くなった。
- 26-2. マルクス主義は絶対的に正しいものであると信じる。現在の社会は全く不合理な社会であって、少数の人間が多数の人間を搾取し、搾取階級は驕りを尽くして安閑と遊んでいるにかかわらず、搾取されつつある無産大衆はほとんど人間らしい暮らしはおろか、その日その日の生活をささ脅かされて、犬猫にも劣る生活をしている。この不合理極まる社会を、合理的な全人類の幸福を充たす社会に変革するための武器としては、マルクス主義以外には何も無い。現在の科学において唯一科学的体系を持っているマルクス主義は、私に明確に教え

てくれた。

- 27-1. 私が次第にマルクス主義に直接的な関心を持つようになったのは、新感覚派の文学が次第に新興のプロレタリア文学理論に圧迫され、諸雑誌の上で両文学理論がいわゆる理論闘争を展開するようになってきた頃からで、その難解な理論は今まで考えていた芸術論のみでは容易に理解し得ないもので、社会科学研究会への入会の勧誘を受け入会し、マルクス主義研究の動機が作られた。
- 27-2. 芸術的方面からマルクス主義について述べる。唯物史観に関心が注がれ、無批判的になり、最初から理論的に正しいというのが先験的な命題であった。マルクス主義を客観的に見ようとするのをあえてしなかった。
- 28-1. 社会思想よりは多く文藝思想に浪漫的な憧憬を繋ぎつつ、専念読書に没頭していた。ブハーリンの『共産主義の ABC』を読む中に、その思想に触れる機会を得、友人から社会科学の研鑽は欠くべからざるものを説かれ、次第にマルクス主義研究を志すに至った。
- 28-2. 現在の一切の経済現象の根幹をなす資本の内圧的法則及び現実的運動法則に関して、最も見事な説明を与えているものは、私の知る限りマルクス主義の側よりする諸論策に、最も科学的な生命が踊っているのを見る。
- 29-1. ブハーリンの『史的唯物論』を読み、今までの自己中心の考え方が徹底的に間違っており、社会を中心とした考え方が正しいものであると思った。自分の思想的な行き詰まりは、マルクス主義によって打開される様に、史的唯物論を読んでそう感じたので、それから社会科学に関する書物を読むようになった。
- 29-2. マルクス主義は正しいと思う。なぜなら、他のいかなる主義も如何に美しい言葉で飾られていても世に最も不幸なる貧乏人から貧乏を救う法を明示していないのに、マルクス主義はそれを最も明示しているからである。マルクスはその労働価値説において貧乏の真の原因を教え、その弁証法的唯物論・唯物史観において、プロレタリアートは自己の非人間的な生活状態を止揚することによって、階級一般を止揚し、人類一般を幸福にするものであることを教え、ブルジョアジーと戦ってこれに勝つことであることを明確に教えている。
- 30-1. S・Sに入った時からが始まりである。何か社会のためになることをしたいという人道主義的な考えが働いていたと考える。

- 30-2. マルクス主義は否定できぬと思う。次の社会が共産主義社会であるということは認めるが、いつなのかは何人も予定できないし、知り得ない。
- 31-1. 研究に至った動機は、貧困階級解放の最良の方法を把握したためであった。デモクラシーの拡大・代議制の完成によって政治を改革し、社会政策の改善をまつのを最良の方法となす一個の社会民主主義者となったが、不況に陥り、労働・小作争議は至る所で頻発し、階級闘争に関する政治意識は徐々に刺激され、マルクス主義を研究せざれば階級闘争に関する原理を把握し得ないと考えた。地主の過酷なる搾取等を知り、現存生産組織を変革することによって被搾取階級の解放が可能であり、問題の解決の途はマルクス主義あるのみとの確信を深めた。
- 31-2. 資本家階級が存続の基礎を保つためには、帝国主義戦争は不可避である。プロレタリアートが自らを解放せんとする階級闘争は、必然的に共産主義社会の建設を目標とする共産主義運動となって現われる。資本主義社会の発展方向に対する認識を肯定する私は、理論的に共産主義を肯定する。
- 32-1. 病気の間、社会的な矛盾、何故金持と貧乏人とがあるのか、その他種々の空想を持ち、ブハーリンの『史的唯物論』を読み、空想が根拠づけられたのが嬉しくなった。私は非常な新しがり屋であり、何物かの刺激を絶えず欲していた。そこに飛び込んできたのがマルクス主義であり、病気と三つの偶然をなして、私にくっついてきた。
- 32-2. 共産主義とは資本主義社会を変更して、無産階級を解放して、彼方にある目標として共産主義社会の説明を与える理論を一体として考える。
- 33-1. 学校の農政学・法律学等の文化科学が、勢い社会問題を扱っていたため、またその当時の講義の中にマルクス主義的色彩もあったため、自然と他の経済学説と共にマルクス主義的経済学をも勉強するようになった。
- 33-2. 農村問題や社会全体の問題解決のため社会政策樹立の参考的一助となることのできるかもしれないが、全部ではないと思う。
- 34-1. 『プロレタリア経済学』をテキストとして本科の学生が懇切に指導してくれ、疑問の所も自由に質すことができた。それ以来、研究会に興味を感じ、マルクス主義の研究に没頭し、その明快な理論に魅惑を感じるに至った。

- 34-2. その科学的研究方法と、社会の構成並びに進化の法則に対する明快な理論的解明とは、他の諸学説に比してなおより多くの科学的真理性をマルクスは包含しているかの如く思っている。私共が学生としてプチ・ブルジョア的地位にとどまっている限りでは、私共にとっては決して実践の科学たり得ないものと思っている。
- 35-1. 大学在学中に経済学の論争に際し、従来の経済学に対するマルクス経済学の優越性を認めるにおよび、これを少し研究せんとするに至った。なお、なお当時漸く問題化する社会運動・社会問題一般に関し、穏健公正なる批判の資を得んとの希望も加わって、研究するに至った。
- 35-2. 経済学上の学説において、これを正しい様に考えている。少なくとも、従来の経済学に対して優越していると思う。
- 36-1. 直接的な動機は家の破産であったと思う。
- 36-2. 資本主義の最も深い強い米国においても大規模の経済恐慌を起こして、何百万人の失業者を輩出している。資本主義の発展は必然的にその没落を招かねばならない運命が此処に明らかに見られる。労使協調は可能であるか、鐘紡の様なそれをモットーとした所でさえも、それが不可能なことが証明された。この様な矛盾を如何にして救うか。現在の様な資本主義の社会では解決することのできない問題であり、この社会制度を変革してこそはじめてそれは達成される。これはマルクスの理論であり、自分もまたこういう矛盾の源である資本の独占が廃されて、はじめてそれがなされると信じる。これまでの自分の研究の範囲ではマルクス主義は正しいと思う。
- 37-1. 山本宣治刺殺事件は大変に私に刺激を与え、一つの動機を作ったといえる。マルクス主義と芸術（主に演劇）理論とを並行して研究していたが、ナップの講演がかなりはっきりと左翼演劇運動の概念を与えたと思う。
- 37-2. マルクス主義は最も正しい主義だと考える。剰余労働による利潤、植民地の搾取、産業の合理化による特別利潤、必然的・周期的恐慌、資本の集中、帝国主義戦争の必然化、資本主義の没落過程、プロレタリア階級の必然的勝利、これらを我々に教えてくれる。圧制されている労働者・農民を解放して未来の輝かしい共産社会を建設するという主義だから、私は感情的にもこれに賛成し

たい。

- 38-1. 不景気で父が商売に失敗し、学資が覚束なくなり、友人から社会問題のことを聞かされ、決してこの社会は完全なものではないと意識するようになった。建築学を勉強しているうちに、独学で社会科学書を読み始め、専門の建築芸術と社会科学とを結び付け、建築理論におけるマルクス主義的方法論を目指す様になり、マルク主義を研究した。
- 38-2. すべての思想中、その科学的な点において、その戦闘的な点において、最も優れていると確信している。幾多の労働者・無産市民の困憊に対して明瞭にその救済改革の方法を指示している。私は労働者・農民を解放するためには、このマルクス主義を武器としてあくまでも戦おうと覚悟し、これに積極的支持をすべきだと信じた。
- 39-1. 関心が教会から無産党へと次第に転じていった。文明に生きよう、科学を捉えよう、欲望を肯定しよう、積極に生きよう、そして無産者のために働こう。こう考えて再び世間へ出た。それから無産党の講演会などたびたび行った。マルクス主義について書物をとって研究したことはない。
- 39-2. 僕は唯物論者ではない。この点で僕とマルクス主義者とは全く違う。マルクス主義者が宗教を否定しても、宗教をなくすことはできない。なぜならば、何時の世、何処にも人は生きる道(宗教)を忘れることはできないからである。僕は貧しき者と困苦を共にしたい点でマルクス主義者とは心が合う。
- 40-1. 大学高等専門学校におけるマルクス主義熱が盛んであり、私も新思想に対する憧憬ないしは好奇心と、研究会員の勧誘によって研究会に入会し研究を始めた。
- 40-2. 現代社会の状況すなわち列強資本主義国の経済的・政治的向上線を、資本主義の内的矛盾による必然的崩壊理論がいかんにして説明するかという点に関して、または日本の特殊の性質を説明していく点に関しては、甚だ疑わしい点がある。
- 41-1. 学友の話から、今の社会は階級対立の社会であり、無産階級は圧迫されている、有産階級は圧迫しているが、歴史の示す如く、圧迫階級は後に被圧迫階級に倒されるのが社会進化の法則であること、殊に無産階級の現在の貧困の実例を話され、今後の社会をもっと合理的なものにするのは吾々青年の任務であ

ると説かれ、興味を持つようになりマルクス主義を研究するようになった。

- 41-2. 階級対立, 階級闘争, 無産階級の必然的な勝利, それらがプロレタリアートの任務であること, 階級対立のない共産主義社会の成立, これは自己解放のみでなくすべての人間解放であること, プロレタリアの独裁, このようにマルクス主義を考え, 社会は必然性をもって進化するのを促進させるのがマルクス主義的社会運動で, この運動に尽くしたいと思っていた。
- 42-1. キリスト教信者であったが, 山川均『資本主義のからくり』を読んで, 資本家と労働者が闘争して資本家は労働者を搾取するもので, 宗教などはただ資本家の精神的な武器であり, 民衆を欺瞞することを知り, 当時の私にとっては実に晴天の霹靂であった。その頃より学友よりマルクス主義の理論を教えられ, 社会科学研究会に加入し, 以後マルクス主義を研究してきた。
- 42-2. 科学的社会主義の理論, 共産主義実現の理論であり, 一つの変革的な理論であり, この故にこそ現在の矛盾を含む資本主義社会を徹底的に暴露・究明しなければならない必然的な理論である。この資本主義社会を倒すために, どうしても労働者を資本の鎖から断ち切らしてマルクス主義(共産主義)を大衆に吹き込み, 革命によって共産主義社会を実現しなければならない最も正しい唯一の理論であると信じる。
- 43-1. キリスト教主義の家庭で養育され人道主義的立場に立ち, 貧乏人に対する同情心から社会運動に興味を持った。大学で級友の勧めでマルクス主義を研究するようになり, 改良主義的社会主義が実現不可能の妄想であり, 被支配階級を欺瞞するための支配階級の武器であることを知った。個人的な研究では不十分で, 組織的・集团的に研究する道を選んだ。
- 43-2. 日本の労働者・農民を解放する唯一の武器であり, 日本共産党はこの理論によって武装し階級闘争の尖端に行くものである。
- 44-1. マルクス主義社会主義の書物を読み始め, 次第に一個人の完成よりも社会問題の研究をなす, また社会問題をはっきりと具体的に発表している, マルクス主義こそ最も正しい, 研究する価値のあるものと考え, また当時マルクス主義の理論の風潮が盛んだから, 一層刺激され研究するに至った。
- 44-2. 研究している中で, 次第にその理論の精確, 正しさを認識して, マルク主

義こそ近代社会運動法則を究明し、資本主義社会の必然的崩壊過程を明らかにするものなるが故に、これこそプロレタリアート解放の唯一の武器であると確信する。

45-1. 入学以来の友が研究を進めてくれ、自分も当初興味に引かれ研究する中で、自分の情熱的な期待に満足させる点があり(特に弁証法)新しい世界に一步を入れたような感がした。無産者なる自分をつかみ得て以来、マルクス主義こそ自己の進むべき進路だと確信し、道を同じくする友を得て、益々研究の度合いを強めた。

45-2. 不況のため資本主義最後の段階で喘ぎ苦しむ経済界、日に日に国民の不信を重ねていく既成政党・政治界・思想・文藝、あらゆる受難の姿そのものである日本にとって、マルクス主義実践が干天続きの日和に夕立ちの如き決定的な治療薬だと確信していた。全圧迫階級の解放のための唯一の武器であって、受難の日本を根本より救う唯一の途であると確信していた。資本主義の打破が共産主義の根本であり、現日本の進むべき道であることを堅く信じていた。

2-2.

左[以下]に掲ぐる二十一篇は昭和五年[1930年]某地方に於ける学生事件に関係せる某高等学校生徒にして起訴猶予処分に附せられたるものが取調の際執筆したる手記なり。

50-1. 現実の問題に真正面から向かうことに決心し、経済学を研究し、マルクス主義をも研究しようと考え、この方面に自分自身の決めている道があるのではないかと思っていた。ちょうど学校では講師から経済の講義を受けたが、マルクス主義の理論正しいことを聞き、その研究を始めた。その後、マルクス主義の政治理論や哲学的方面を研究するにつれ、マルクス主義の正しさに今更ながら驚嘆した。

50-2. 共産主義(マルクス主義)は現在の社会に対する最も正しい鋭い批判者である。独占の問題・失業・市場獲得の問題・産業合理化の問題・戦争の問題等、多くの現在社会の問題に対して正しい批判をなし得ているのはマルクス主義以

外にない。我が国においても正しいものであると思う。

- 51-1. 文学論・小説書等を見始めた。これらを通じて文学界を見るに、最近著しくマルクス主義の傾向が浸潤し、いわゆる左翼的傾向が右翼的傾向を凌駕するに至ったのを感じさせられた。ここにマルクス主義に対する研究心を煽られ、また現代のインテリゲンチヤ常識としても、一応マルクス主義を研究するの必要を感じられた。
- 51-2. 無条件に全部承認することはできないが、大体において賛意を表する。なぜなら、社会生活においては最大多数の幸福をもって、そのモットーとすべきであると信じる。現代資本主義の一般情勢を観察するに果して最大多数の者が幸福と安住を享受しているだろうか。否と答えざるを得ない。最大多数を占める者は明らかに無産者階級で、しかも年々失業・就職難・賃金の悪化等により益々貧窮化し生活に窮迫している一方、少数の資本家が一般大衆を搾取することによって豪華な生活をなしている事実が看取される。これら無産者階級解放、最大多数の幸福を標榜するものこそマルクス主義者であり、この点において私はマルクス主義に賛同する者である。
- 52-1. 簡単に言えば、芸術論・美術史等の研究において唯物史観が如何に重要であるかを感じたるが動機である。非個人的民衆芸術は民族的な考察と歴史的な考察とを必要とする。社会全体からの究明が必要だ。ここに経済問題と結び付き、唯物史観と連関する。かくして、経済学の研究・唯物史観の研究・史的唯物論の研究・マルクス主義の研究を始めた。
- 52-2. 東洋の美術史、日本のそれにおいては、その経済関係からの解明に多大の興味を覚えている。政治的方面・実践的方面よりも、理論的・経済的方面の研究に興味を持つ。
- 53-1. 寄宿舎の同室に K がおり、彼の書籍を読み、次第にマルクス主義に興味を持つに至った。導入の勧誘に従って組織的にマルクス主義を研究するに至った。
- 53-2. 現在では日本の如き特殊なる国家においては至難なことだと思う。
- 54-1. 研究会への勧誘を受け、それに応じて研究を進める中、一通り全く不完全ながらマルクス主義の何たるかを会得したように思う。

- 54-2. 現在の資本主義制度下においては被圧迫民衆の徹底的開放は望み得ない。資本主義なるものは結局行き詰ってしまうのではないかと思うようになった。だがプロレタリアの独裁後、果して国家権力が消滅して自由の天地が生まれ出るものか、その点に関しては研究中も現在も多分の疑問を持っている。
- 55-1. かねて交際していたH君がマルクス主義を研究していて、同君の下宿にたびたび遊びに行つてマルクス主義に関する話を聞いている中に、自分でもマルクス主義に強く惹かれた。マルクス主義は中心なき現在の自分の生活にとって中心ともなり得るが如き真なるものを有するものではないか、そうでないまでも少なくとも顧みるに価する何物かを有するはずだと考えられた。今後一人の知識階級として世を渡つてゆくについて、常識としても知らずに過ごすわけにはいかないと考えていた。
- 55-2. 共産主義の最終目的であるところの共産社会、すなわち最大多数の最大幸福ということは、私の理想と一致する。現在の社会より望ましく考えられる。マルクス主義を理論として見た時、よく筋が通っている、理論がかなり実践的にできていると思う。経済学にかなり興味を持っている。以前考えていたような無意味乾燥な理論ではなく、実に興味深い。政治的な理論、殊に国家論・政党論・労働組合論などに関しては、何だかぴったりと来ない。マルクス主義は現代社会の底を流れる大きな思想の一つであり、かつその価値があるということについては、疑を有さない。
- 56-1. 寄宿舎にいたKが社会科学の研究を勧めてくれた。初めは危険と感じて肯じなかったが、そういう方面の知識を得ておくのも何かのためになるであろうと思い、好奇心の動くままに左翼の人々と近づくようになった。
- 56-2. 大体において社会を観察する一つの有力な学説だと思ふ。その経済学の如きは優れた一面を持っていると思うが、その骨子である資本主義制度を倒し、共産主義社会を実現するという考えはいかがかと思ふ。その他、多大の疑問を有するもので、マルクス主義を全然そのままに受け入れることはできない。時代の進行とともに後人の修正・完成を待つところであると思ふ。
- 57-1. 動機はズルズルべつたりといつの間にか研究するに至つたというようなもの。そこで彼等の優れた理論行動(××会雑誌、自由演説会、教授との理論闘

争における)にまず感動して、その研究に入った。

- 57-2. まず文学理論・哲学理論に興味を覚え、とにかくそのままそっくり正しいものであると思った。当時、コミュニスト・マニフェストを読んで、なるほどいいものだったことがあるが、何しろ当時実践への傾向が盛んなころだから、直ちにレーニンの書物に親しみ始め、哲学的に共産主義は正しいものか否かといった様なひまはなかったように思われる。
- 58-1. 文学を愛好していた。高等学校入学後プロレタリア文学をも愛好するに至った。文学の理解もまた社会科学、特に経済学の理解を必要とすることを知り、特にマルクス主義経済学の研究を始めた。この時 A の勧誘に遇い、社会科学研究会に入り、マルクス主義の研究を益々深くやるようになった。
- 58-2. 経済学の理論は相当正しいものではないかと思った。政治の問題とか組織の問題は正しいのか正しくないのか、はっきり分からなかった。
- 59-1. 研究中ブルジョア経済(初めは主として経済学をやりましたから)を反駁せる卓越した理論に幾多出遇した。しかもその論法が私の非常に興味するところのものであった。この経済学が漸次政治的・哲学的・芸術的な方面に延長されるに至って、ついにマルクス主義者としての自分を認識したが(単に理論的な方面にしても)それが漸く実践への移行となって現在におよんだ。
- 59-2. マルクス主義をもって絶対的な心理としていないが、私の経験した他の理論(科学的)よりも真に近いと認識している。結局マルクス主義を真とするに至った。社会主義社会へはプロレタリア独裁を経なければならない。
- 60-1. 父の職業が呉服商で、幼時より商用を手伝っていたため、漠然と将来においては経済学を研究しようと思っていた。大学では経済学をやるつもりでいた。同じ研究に志す人とすれば興味もあり効果も多き由、勧誘され SS に加入した。
- 60-2. その変革的理論は偏狭的であるから、理論的功績の認めるべきは認めるとしても、宗教思想・道徳的観念より訂正されるべきである。
- 61-1. 私共のグループに突然飛び込んできた男によって、マルクス主義を抱く人びとがいることを知り、今までの自分の主義主張に不真面目な点を清算し、一層勉学の必要を痛感した。マルクス主義の入門書を読み、疑問はその男が多くの場合明快な回答を与えたので、次第次第マルクス主義に傾いていった。文学

愛好の性質からも例の男の遊説で、遂に恐いものに触れるべく決心した。

- 61-2. いわゆる改良主義なるものがその根本原因を極めることなく、表面に現れた事柄に対して弥縫策に過ぎないものに反して、マルクス主義にあっては現今の資本主義制度なるものを根本より比較的の分析して、その欠陥の依ってくる所を明確にして、これを根本より改善し理想目標を共産主義社会に立ってその理論を進めている点、在来の学説と甚だしく異なっているところに、大いに興味を持った。マルクス主義に対する反対意見を述べた書籍も相当あさって読んでみたが、その多くはマルクス主義の枝葉を捕えて、これに対してくどくどしく哲学的解釈を下したものが多く、根本的にその非なる点を明快に示したものは私の見た範囲内ではなかった。かような次第で、マルクス主義を現在存する理論の中で一番信すべきものであるとして、益々深く研究せんとした。
- 62-1. 史学に興味があり、著書の中に唯物史観なる話を見、それが社会の構造やその発展を経済的に説明するということが特に面白く感ぜられた。今まで学校で教育されていた歴史は、単なる事実の羅列に終わっていて興味がなかったが、これを経済的に説明するというのは奇異に感じたわけで、ここに唯物史観を理解せんとして河上氏の著作やブハーリンの書を読み、唯物弁証法・唯物史観・階級闘争等の語を知った。
- 62-2. 資本論で説いているところは、ある程度尊敬するところがあると考えてる。資本家と労働者との関係において搾取関係を説いたのはマルクスのみの特売ではないが、これは事実だと考える。ここから階級闘争が起ると考える。恐慌の理論も、今日実際に起こる恐慌も資本家はあくまでも剰余価値を得ようとするからで、これらを除去せんとするのは至難のことと思う。貧乏人に対する社会政策は何ら顧みられるところのない有様であり、ここに共産主義運動の乗する余地があると思う。これらの人を救済してやりたいのは誰しも思うところだが、しかしその手段として共産主義社会だけが必要だとは考えていない。マルクスの現在の社会分析にはある程度賛意を表すが、共産主義社会は一種の空想で果して実現性があるのか疑問に思う。
- 63-1. 入学して、隣室の者が警察に検束され、それを何とも思っていない人々があるに対し、日夜遊び回っている人々があるという有様で、私の眼には何故同

じ×高にあって、こんなに異なった生活をする人があるのかと、ここにマルクス主義に対して興味を抱くに至ったが、進んでマルクス主義に関する書物を読まなかった。アウグスト・ペーベル著『婦人論』を読み、特に興味を持って読了し、マルクス主義に対し好意をもち研究するに至った。

63-2. 被圧迫階級解放という点には賛成していたが、その方法に至ってはその国の特殊事情があるから、レーニンやその他の人口がロシア革命の経験によって著しく戦略的方面についての著書に書いてあることは、そのまま日本に適用することは不合理であると考えていた。

64-1. 精神生活に歴史を離れた永遠不滅の真理を信じていたので、最初は頭から反対せざるを得なかった。社会科学研究会員の処罰事件があり、生徒側に反抗の氣勢が上がり、はじめて我々の生活に接近した点に大きな時代苦と社会苦、そして解決せざるべからざるの問題の横たわるを見て、深く考えさせられるようになった。もっとさらに現実に根を張った吾々人間の生活の中から真に生まれた血であり肉である力強い、真に人類社会に貢献する学問をしなければ価値がないことを痛感し、社会とか現実とか時代というものをもっと忠実に率直に経験し、研究しなければならぬと、一つの時代的呼吸と共に考えが一変してきた。経済関係からのイデオロギーに至るまでの全社会の構造やまた歴史的社会の発展を物質生活の根拠からすべて明確に全面的に体系付けて、非主観的な最も科学的な態度を持している点にまず一驚を喫して、益々研究欲をそそられてマルクス主義は次第に魅力に満ちたものになってきた。

64-2. 政治的立場をほとんど無批判に片づけたことが残念である。殊に日本においてはマルクス主義的運動はほとんど共産主義運動に限定されて、日本の歴史的国情に何ら深い考慮もなく、単に経済的事情の類似からこの運動の日本における正当さを立証しようと企画していることは、根本的に誤っていると思う。

65-1. 資本の独占化は益々著しく、生産の集中と商品市場の狭隘は、漸く資本主義没落の必然性を表し、資本主義的発達諸流は全く停滞の形勢に陥り、失業労働者は日を追って多く、米国資本主義の経済的優勢は日本の諸生産に著しく打撃を与え、労使間の闘争は日を追って激化し、社会問題が続発するようになってきた。これら社会問題の解決という自然発生的欲求が共産主義思潮による科

学的解決方法を暗示され、しかも資本主義社会崩壊の後に来るべき必然の新中国を建設するために、目的意識的研究に進んでいった。

65-2. 階級闘争の必然矛盾の内より新しき進化が起り、この進化が社会的進歩であり、矛盾こそが新しい進歩の前提である、この新しいマルクスの主張は従来の一夜作りの諸説と全く趣を異にしている。この見地より資本主義社会の必然的崩壊と、次に来る共産主義経済の必然こそ、マルクス主義の社会的に最も重大なるものである。プロレタリアートをもってこの段階における最も進歩的階級とし、労働者・農民は自己解放のため、また資本主義社会の矛盾を揚棄して、新文明の社会を作らんとするマルクス主義は絶対的に正しいと思う。

66-1. 私にとってマルクス主義は他の人達と違って、生命的なものでなく、他の諸々の傾向と同様、私の思索の中に介在した一分子に過ぎない。

66-2. マルクストではなく、マルクス主義を研究中の学徒である。階級闘争と言って無理やりに反抗し暴力をもって事を決しようとする行き方には反対である。従って自らを顧みることなくして、既成政党を破壊し、一夜にして労働者・農民の天下を作らんとすることも異議がある。

67-1. ただ単に共産主義はどこまでも過激な思想で、排斥すべきものであると考えていた。マルクス主義経済学の剰余価値の話、労働者の窮状と資本家の横暴の話、また唯物史観についての話を聞き、非常に面白いと思った。マルクス主義の本を読んでみようという気になった。内容はほとんど理解できなかったが、何となしに好奇心を感じて熱心に読んだ。級友と読書会・研究会で系統的に研究した。

67-2. 現在の私はマルクス主義の正しさを認めざるを得ない。特に比較的多く研究してきた経済学の範囲では、マルクス主義経済学の主張が他の学説に比して一歩進んでいると思われる。留置所に入って静かにいろいろと考えてみると、マルクス主義の是非を下すことは早計であったと思う。現在の私は若干の疑問を持つようになった。

68-1. 文学の興味からプロレタリア文学論によって、マルクス主義に関心を持つようになった。部屋の同僚から話を聞き、いよいよマルクス主義に興味を持った。マルクス主義はあくまで正しい、研究しなければならないというようなこ

とを盛んに言うので、厭世主義を脱したいと思っていた私の考えは、全然盲目的にマルクス主義の方へ傾いていった。

68-2. 正しいかどうか相変わらず解らない。

69-1. 級友のマルクス主義に関する著作を借りて読み、また学校のマルクス主義に関する話、あるいは社会において惹起している資本家対労働者、有産階級と無産階級のすべての闘争をマルクス主義的説明によって明快に、しかも理論的に説明する学友の話を書く時、マルクス主義が如何に複雑なる社会現象を説明し、吾々に対して理解させてくれる説であるかを知った時、マルクス主義に対する興味は大きな力となって現われてきた。社会と政治現象のすべてが、その経済的根拠に支配されていることを知った時、マルクス主義経済学が如何に秀でた学問であるかを知った。

69-2. 研究するにつれ、マルクス主義の絶対正しいことを認め、支配者に対する憎しみが必然的に生じた。その理論を実践に移したならば、人類少なくとも被支配階級一數より言って九十五%を占める大多数の人々の生活がなくなるであろうことを認める。独占欲または私有欲に包まれた人々は共産主義に対して非常な誤解を持っている。彼等は生産関係を考えずに、生産品の分配のことをのみ考えて、すべての価値の等分が共産主義であるかの如き幻想を持っている。そのために共産主義を蛇蝎視しているが、共産主義はそんなものではない。

70-1. 無産階級に対する人道主義的な同情は自然と無産者解放の社会運動に私の目を向けさせるようになった。無産政党の労働団体の運動に興味を向けており、これらの運動の基礎を知るべく、エンゲルスの『社会主義の発展』を読んだのが、研究の最初である。

70-2. 無産階級の向上進歩は当然願わしいことであるが、その方法は多く、しかもそれは時代と国情によって決定せられなければならないと思う。マルクス主義は真理の具体性を説くが、マルクス主義自身についても考えてみなければならない。[一例として唯物史観について] 真の歴史は経済と精神との交互作用によって発展していくと思う。

2-3.

左〔以下〕に掲ぐる十五篇は昭和五年〔1930年〕某地方学生事件に関係せる某専門学校生徒中起訴猶予処分に附せられたるものが取調の際執筆したる手記なり。

76-1. 元来、教育に対する憎悪と反感があった。学生の自治運動が非常に盛んな時で、福本イズムが燎原の火の様な勢いでインテリゲンチヤの中に食い込んでいる時だった。思想的に目覚めた私が、その大きな渦巻の圏外に立ち得なかったのは当然であった。学生会の中心スローガンは血気に溢れた私の心をつかむに充分であった。これらはマルクス主義に対する興味と関心を呼び起こし、三・一五事件の発表、労働運動に対する記事をたびたび読み、私の教育に関する憎悪と反感は社会的反感すなわち教育制度に対する憎悪になり、自分の有するすべての疑問をマルクス主義の研究によって氷解しようとするようになった。

76-2. マルクス主義は一つの正しい科学的な基礎の上に築き上げられた人生観であり、世界観である。マルクス主義は厳として科学である。明瞭に科学である以上、如何なる迫害にも逆宣伝にも、それは屈することを知らないと思っている。真に科学的な無産階級の世界観・人生観であると思う。その人達が真に解放される方法を示すものである。マルクス主義をより徹底し発展せしめたのが、レーニンズムでありボルセヴィズムすなわち共産主義ではなからうか。マルクス主義は現代においてまた未来において、重要な最も輝かしい役割を果たす様に思われる。

77-1. 同級生のマルキスト M・S 諸君の非常に意気に燃えた活々たる生活の姿を絶えず考えさせられていた。彼等がこうした率直な生活にひたっているには、彼等の世界観がそうするのではないだろうか。こうした考えが、たまたま M 君の勧誘で弁論部に入り、更に S・S に入る動機になり、マルクス主義を研究してみようという考えになった。

77-2. マルクス主義の世界観・社会観は正しいと思う。現実の社会を資本家・労働者の階級社会と見做し、両階級間の間断なき矛盾闘争により社会・文化は発展しつつあること、中産階級は急テンポで没落、資本は少数の大金持ちブルジョアジーの手中に置かれ、両階級間の闘争は益々先鋭化していくこと、生産は何

ら計画的になされることなく無政府的状态でどしどしなされ、それに起因して不景気・恐慌は間断なく社会を襲う。そこにあつて国際間の対立も逼迫している。かかる矛盾を内包し、行きつく処まで行きついた資本主義社会に生存する一中産階級出身の私として、その現実の社会のありのままの姿を見せつけるマルクス主義は正しいものとして受け入れられた。

78-1. 私の興味はプロレタリア芸術理論にあつた。同期生・同県人の K が左翼雑誌や参考書を教え、プロレタリア芸術を研究するように勧めた。次第に自分で研究するようになり、プロレタリア芸術理論および経済学は正しいものであるように思われてきた。これらの理論も結局は運動と纏らねばならぬと教えられ、社会科学研究会に入会した。

78-2. マルクス主義の諸文献においていうところは正しく、かつ科学的であると信じていた。従つて、この理論上正しいマルクス主義はまた実際にそれを適用しても正しいものであると信じていた。

79-1. 家庭が両親死亡後一家分散し、家庭的温情に浸り得ず、かつまた人生・宗教なるものを考えては煩悶していた。教会へ行ったが何ら得る所なく、人生社会に対する疑惑は益々深まり、キリストの正義感が実行力のないことをはっきり意識させられた。そして正義感社会問題に向かつて動くようになった。

79-2. マルクス主義の理論によって学校で教える学問が、殆ど空虚で被支配階級を支配階級が搾取し欺瞞する以外の何ものでもないと考えようになつた。すべての問題が階級闘争の表れであり、現実の社会・政治・労働問題も結局この理論によって無産階級が政治的・経済的に圧迫下にあり、これを解放するにはプロレタリア運動と結び付いて、実践を行なわなければならぬと考えた。そしてプロレタリアを解放し、貧富の差別を撤廃するには、実にマルクス主義であると考へた。

80-1. 動機は現代資本主義の支配する社会に矛盾と不満を感じたからである。社会におけるあらゆる方面を観察せんとして、宗教的・政治経済に関する書物を貪り出し暇あるごとに読んだが、満足を与えてくれたのは殆どなかつた。今まで恐ろしいものとのみ思つていたマルクス主義に関する書物を読み始め、面白くなり、社会の根本を動かすものはマルクス主義に則つた経済法則でなければ

ならぬと信じた。階級闘争の必然性、恐慌の必然性等々を、具体的かつ詳細に学び、人類の解決、プロレタリアを解放するものはマルクス主義であると信じ、研究し始めた。

80-2. マルクス主義は絶対正しいと信じていた。[マルク主義の主張、帝国主義と戦争の必然性、等々]あらゆる社会事情がはっきり彼の観察に漏れなく現われるのを見る時、私は彼の主義こそ人類社会を最後において支配するものであり、資本主義社会の後は彼の主義に則った社会でなければならぬと信じた。これが私のマルクス主義に対する考えであり、マルクス主義を絶対に正しいと信ずる所以である。

81-1. 歴史の研究に依りて、政治に相当の興味を覚えていた。雑誌『改造』『中央公論』等を読むにおよび、中の論文に刺激を受けたのがマルクス主義のなものに接した最初である。河上肇著の『マルクス主義経済学』を読了するにおよんで、マルクス主義の概念を掴んだように思う。社会科学研究会に入会して、組織的・団体的に研究し始めた。

81-2. 今までの研究の範囲内で、マルクス主義の理論は正しいと思っている。従って、マルクス主義は人類の平和幸福のためというより、むしろ史的唯物論的見地によりて社会進化の途上に生まれた時代の世相を反映した社会問題と考える。現代の他のすべての学問より、生き生きとした刺激性のある学問として吾々に迫ってくる。

82-1. 『文戦』『戦旗』を読むうちに、次第にプロレタリア文学に興味を覚えるようになった。学校にストライキが起り、同じ実行委員からいろいろ社会科学の理論を聞いた。弁論部に入部し、宗教批判、戦争論、その他社会問題に関する話を聞いた。弁論部の人達は大抵S・Sメンバーだったので、自然左翼的思想が展開され、私もマルクス主義に興味を持ち、ブハーリンの『唯物史観』や雑誌『インターナショナル』を読むようになり、S・Sに入会した。

82-2. 現代資本主義社会を科学的に理論的に解剖し、その歴史的発展すなわち資本主義社会を変革し、プロレタリア独裁を経て、共産主義者社会の実現を説いたマルクス主義は、現実の階級闘争の中から産み出された最も正しい主義である。私はこの主義実現のため、学生の立場から幾分でも尽くすのは、真理を追

究する学徒として正しいことであると思う。

- 83-1. 宗教と社会主義に関する著書を沈読していた。大学で弁論部員の理論に傾聴しており、先輩が常に左翼的な理論を展開していた。彼から宗教や社会主義、マルクス主義に関する著書を教えられ、レーニンやソビエト・ロシアについて知ることができた。最も感銘した著書は、カウツキー著『基督教の起源』、N・S 著『社会的基督教』、河上肇著『近世経済思想史論』等である。社会の新しい事柄にはすぐに目を付けていた。かようにして一途にマルクス主義に入っていった。
- 83-2. マルクス主義を研究している間に、マルクスの理論が(特にその方法論が)正しいように思ったのと、マルクス主義の新しいものの見方が私の興味を引いた。現実の社会は共産主義社会へと方向を向けていることと信じる。少なくとも、共産主義社会が現在の社会に優れるものなることは、人類進化の法則からいって信じる。白色テラーの激化の度に応じ、戦術としてのマルクス主義が変化してきたので、次第に革命的・過激的になるのは、むしろ正当であると思う。
- 84-1. 単にマルクス主義の友人等と交際している間に、マルクス主義の話を聞き、これに興味を有するようになり、そしてその書物を借りて読むようになり、盛んに研究するようになった。ここまでは個人的な研究に過ぎなかったが、学校の同組のマルクス主義者の学友と知己になりてより、一層研究するようになった。
- 84-2. 現在プロレタリア階級がかくもブルジョア階級に圧迫され、かつ奴隷のように使用されて、何ら不自由ない階級が存在していることを知った時、私は赤旗の下に吾々は資本家国家を破壊して、共産国家の建設を切望した。それ故にマルクス主義(共産主義)を唯一のものとして主張しなければならないと考えた。
- 85-1. 社会問題に興味を有していた。従来宗教による人生正義感があまりに個人的に走り過ぎていくように思われてきた。空想的社会主義思想に親しんだが、あまりに理想的過ぎて、彼等の理想の実現は望まれないように考え、エンゲルスの『空想から科学へ』を読んで、科学的社会主義・マルキシズムはいかなるものか、その方面の著書を読みたいと思ったのが動機である。

- 85-2. 現代の諸社会悪, 社会的不正義は資本主義制の現代社会の必然的産物であり, この諸社会悪を絶滅せしむるためには, 現代の資本主義制度を倒さねばならない, そして階級闘争の時代を経て階級対立なき未来の社会を望まなければと, 考えていた. 私はマルクス主義を十分知り尽くさずして, マルクス主義流行の熱にうかされて, 学徒としての本分を忘却したる行動をとった. 今後は, マルクスの説く世界観を, 思想のみ切り離して, 一層深く究明しようと思う.
- 86-1. 文芸上よりプロレタリア文芸に関心を持ち, その思想的根拠である社会主義に興味を有していた. それを科学的に研究するためには, 現在マルクス主義を除いて他にないと考えた. 最も優れた芸術家になるためには, また同時に最も優れた運動の闘士でなければならないと信じていたから, その準備として研究に従った.
- 86-2. 最も優れた思想であって, 現代資本主義社会を最も科学的に解剖して, 被圧迫階級が支配階級との闘争においてこれを打倒し, 共産的経済社会を建設するものであることを唱えている主義であり, 文芸的立場からと思想的立場から, この主義を最も正しい思想であると考えていた. なお, マルクス主義を奉ずる人達の行動に非常に尊敬の念をもっていたので, その主義にも非常に共鳴した.
- 87-1. キリスト教の家庭で深く社会正義の観念を培われてきたが, 次第に社会の矛盾を見て, 精神的な不安を感じていた. 即ち現在の社会は, 自分等が幼少時代に想像した理想の社会ではなく, 矛盾が多く存在し, 宗教と根本的に対立する社会主義こそその矛盾ある社会を正しく指導するものであって, 宗教以上に我々が研究し, これを自分のものとしなければならないとの説明を, 止宿大学生から受け深く研究した.
- 87-2. 多数の幸福のためにぜひ必要なものであり, 最も正しいものとする.
- 88-1. 病を得て休学のやむなきに至り, この間文芸書を沈読し, 左翼的色彩ある小説類を読むようになった. これらの小説から未だ知らなかった何かしらの力強い感を抱き, 『タンクの水』なる小冊子を買ひ求めた. 転学し, 始めて経済学に興味を覚え, 堺利彦の『社会主義』なるパンフレットを読んだ. 学内の経済史研究家に刺激され, マルクス主義に関する読書会を持つに至った.
- 88-2. 今日まで抑圧されてきた階級の人々に真の幸福をもたらすものは, この主

義を研究することによって達せられると確信するに至った。プロレタリア科学こそ真に正しい科学であり、ブルジョア科学は既に科学としての生命を失い、一つのイデオロギーとして残っているのである。自分はこの意味において、実践運動に入った。

3. 検討

3-1. 1920 年代前半までの検討

本稿で対象としている時期は 1920 年代の後半であった。しかしそれに直接入る前に、これ以前の時期においてマルクス主義が大衆をとらえた要因は何であったのか。これに関して筆者はすでに、マルクス主義が導入され出した 1900 年代の初頭から検討してきた（深澤〔2018, 2019a, b〕）。そこで示した内容は本稿以下の検討とも大いに関係するため、改めてここから確認していくのがよいと考える。当時マルクス主義が大衆をとらえた要因として、筆者は以下の提示を行なった。

ロシア革命（1917 年）等々を時代背景として、大正期に民主主義・社会主義を求める動きが復活・活発化し出し、そこにマルクス主義・マルクス経済学の主張がまさに噛み合った。噛み合った要素としては、元来マルクス主義が唯物弁証法・唯物史観・マルクス経済学他を複合・包含した体系性を有し、その中の一部として観念論に対置した唯物論と、生物の進化の法則にも似た社会主義建設を展開させていく理論他を内包させ、これらはマルクス主義と同義的に一般に「科学的社会主義」と称されるものであり、そうした「科学的」貢献性をマルクス主義が併せ持っていた点が挙げられる。そしてかような体系性はマルクス主義の中でも多岐に及んでいるが、一つマルクス経済学の論理内で集約させて確認していくとすれば、次のとおりである。上記の社会主義思想に寄与する「科学的」性格・あるいは「科学的」根拠としては、『資本論』等々でなされるマルクス経済学独特の経済学的分析であり、また商品から始まり恐慌等々へと向上展開させていくその体系的性格、こうした特徴・特長をマルクス経済学が包括的に有しているわけである。これらをマルクス主義とマルクス経済学が有していたことと、そしてまた上

記の時代背景と社会主義への希求とに符合したことによって、当時の特に知識層はマルクス主義・マルクス経済学の既述の点に着眼し、または駆られ、その積極的導入に努め、そして導入とともに研究と考察が同時並行的に行なわれていったわけである。この過程で先駆的立場にあった者として、特に河上肇等々による貢献と影響力が強く、彼らのマルクス主義を基にした主張が当時のインテリゲンチヤの心を広くつかんでいった。

これらが本稿で対象としている1920年代の後半、それ以前の段階においてマルクス主義・マルクス経済学が興隆していった、その要因また理由として提示した¹¹。

3-2. 1920年代後半の検討

(1) 1920年代前半までとの関連【マルクス主義が有する通底的な普遍的要素】

上記示した筆者のこれまでの主張(1920年代前半までの検討)は、本稿の前章で示した(1920年代後半時の)各人の手記から再認識される内容である。このように筆者は前章の手記の内容と、本稿の執筆で改めて認識することができた。まず筆者が上記示した1920年代前半までの検討内容と合わせて、以下を確認していくとすれば、次のように示すことができる。

前章の手記において目立って特筆されるのは、何といたってもマルクス主義に科学的・正当性・真理性・優越性を見る、といった主張が非常に多いことである。(前章10-2, 15-2, 16-2, 20-2, 21-1, 22-2, 24-2, 25-1・2, 26-2, 28-2, 29-2, 34-2, 35-1・2, 36-2, 37-2, 38-2, 42-2, 他多数。)ではそこで、このような科学的・正当性・真理性・優越性といった各人の判断と主張に関する考察に入っていくたい。

まずマルクス主義の一体どの点において、各人はこうした判断・評価を下しているのだろうか。それを伺うため、各人の手記から重要と考える点を羅列していくと、次のとおりである。マルクス主義について、現象形態にとらわれずに事

¹¹ 以上、深澤(2018, 2019a, b)を参照。

物の本質を弁証法的・対立的に考察，根本的に社会現象を批判，体系性，理論的，理論の精緻性・透徹性・明快性・精確性，理論構成の哲学的性格，生き生きとした刺激のある学問。このような主張が多く見られるわけである。（前章 10-2，12-1・2，20-1，34-1，44-1，55-2，61-2，64-1，69-1，81-2，など。）

さらにマルクス主義に対するこうした評価とその要因，これに付随・符合させて，各人がマルクス主義において特に評価しているところを次の要件として聞いてみたい。それは以下のとおりである。社会のあらゆる矛盾が一つの基本矛盾から発生していることを把握，社会的矛盾の克服，マルクス経済学（ここには貧富の差，資本家・労働者との階級対立・搾取，支配・被支配，資本主義経済の運動法則，必然的結果，資本の内圧的法則及び現実的運動法則，労働価値説による貧乏の真の原因，剰余労働による利潤，植民地の搾取，特別利潤，必然的・周期的恐慌，資本の集中，帝国主義戦争の必然化，資本主義の没落，等々の分析を含める），プロレタリア階級の必然的勝利，史的唯物論（唯物史観），弁証法的唯物論，弁証法，資本主義社会を科学的・理論的に解剖，歴史的発展として資本主義社会を変革・プロレタリア独裁・共産主義社会の実現，人類・社会進化の法則，現在の諸社会悪は資本主義体制の必然的産物。このような提示が聞かされる。（前章 9-2，18-2，25-1，28-2，29-2，37-2，41-1，45-1，62-1，65-2，67-1，82-2，83-2，85-2，など。）

ここで前節 3-1 での既述の論点とも合わせて整理すると，① マルクス主義が唯物弁証法・唯物史観・マルクス経済学他を複合・包含した体系性，そこから特に生物の進化の法則にも似た社会主義建設を展開させていく理論，そうした「科学的」貢献性をマルクス主義が併せ持っていた点，② またそれをマルクス経済学の領域・理論内で集約させて確認した場合、『資本論』等々でなされる経済学的分析・体系的性格，これらをマルクス経済学が包括的に有している点，こうした①②の特徴をマルクス主義・マルクス経済学が有しており，既述の時代背景と社会主義への希求とに符合しながら，マルクス主義が興隆していった。これらのことが前章と本章の検討で，共通して把握できるのである。そしてマルクス主義に興味を持った，あるいは持たせた著名人として，やはり河上肇を挙げるものが多く，あと著作的にはブハーリンの著作が挙げられており，これらの影響力が大きかっ

たことが知れる。(前章8-1, 10-2, 26-1, 28-1, 81-1, 82-1, 83-1.)

上記①②として挙げたマルクス主義・マルクス経済学の要素は、すでに本稿3-1にて筆者がマルクス主義・経済学の特徴・特長として示したのもであった。さらに上記の確認から把握できるように、それらはマルクス主義が普及していく際に共通して有している通底的普遍的要素と見ることができよう。と言うのも、そうした要素とそれを基礎に普及していく様相は、本稿で対象としている1920年代後半それ以前からも見られるのであって、それは筆者の以前の論稿でかくのとおり示してきた。そして本稿で対象とする1920年代後半においても、さらに共通して把握できた次第である。

さてでは、そうした以前との関連内容を繰り返すことで検討を終始させることなく、以下からは本稿で対象としている1920年代後半の詳細状況と、また具体的な特徴について、項を改めてさらなる検討に進んでいくこととする。

(2) 当時期における多方面におけるマルクス主義の普及と展開

深澤(2018, 2019a, b)で対象とした1920年代前半までの段階では、主に知識層(主として大学教員他)におけるマルクス主義の普及を示していった。さてその後、本1920年代後半の特徴として指摘できることは、この頃になってくると、各人の手記を見てもすぐ解るように、まずかような知識層以外に、かなりのほどマルクス主義が浸透・普及していることが即座に理解できよう。さらにまた注目すべきは、この時代にはマルクス主義がいわば「時代の空気」のようになっており、浸透・普及のほどもさることながら、かなりのほど影響力を強めていたことも理解できるのである。(前章9-1, 16-1, 18-1, 21-1, 33-1, 40-1, 44-1, 55-1, 64-1, 76-1, など.)

つまり前章での引用は学生という範囲内での手記であったのではあるが、それでも彼らにはこのように、あるいはここまで普及し浸透し、感化される者が多かったのである。それもさらに着目すべきは、上記前節3-1で示したマルクス主義の特徴・特長としての理論的内容を学生たちはかなりの程度理解して、そしてその理解を併せ持って、いわばそれを理論的な「武器」として、彼らは他に勧め、あるいは関係者から勧められているわけである。特に前項(1)で①②として示し

たマルクス主義が普及していく際に有する通底的・普遍的な要素，そしてその展開具合とが，ここにおいても如実に把握できよう。

これに関するさらなる内容理解に入っていく。次の点に着目したい。まずマルクス主義に接近したそのきっかけの分野・領域に関してであって，これがこの時期非常に広範囲に及んでいる。上記示した哲学・歴史学・経済学はマルクス主義の三つの構成要素として知られる有名なものであるから，こうした学問的な領域からマルクス主義に例えば興味を持ちながら接近していったという者は多くいて然りである。今回の手記でも当然それは確認できる。しかしこうした領域以外で今回非常に目立って新鮮で興味を引くのは，芸術という領域からであった。それも特に文学からのマルクス主義への接近である。(前章 17-1, 21-1, 26-1, 27-1・2, 38-1, 51-1, 52-1・2, 57-2, 58-1, 68-1, 78-1, 82-1, 86-1, 88-1, など。)さらにこの中には，(筆者の認識不足から正確な因果関係までは的確に指摘できかねるのだが，管見の限りでは一見マルクス主義とは無関係とも思える) 建築学や美術史の研究からマルクス主義に入っていた者もいる。(前章 38-1, 52-1・2.)

以上の検討と考察から，前節 3-1 そして前項 (1) で示したマルクス主義の要素と特長(特徴)とを基にして，この 1920 年代後半においてすでに知識層はもとより，学生を中心に，そしてそれ以外の諸相にも，マルクス主義はかなりの程度，そして多方面の領域にわたって，流布し浸透し影響力を増していたことが解るのである。

(3) マルクス主義・マルクス経済学の現実的妥当性 ①

さらに 1920 年代後半の検討から示されるべき重要な論点として，以下の件にも着目しなければならない。前章 2 の手記の中で一番目立つのは，何と言っても次の指摘と見解である。資本家と労働者の階級対立，労働者の悲惨な生活，貧富の差とその撤廃，一般民衆の困窮・圧迫，労働者・農民の解放，勤労者階級的生活保障，地主の過酷な搾取，少数の資本家による一般大衆の搾取，失業，労使間の闘争，このような指摘であって，そしてこれらを共産主義社会によって弁証法的に止揚し解消する必要性を訴えながら，そのために論理的に依拠するところを

マルクス主義の諸理論に見ている、こうした点である。(これらの指摘はかなりの多数にわたるため、数値番号による例示は不要であろう。)

かつて筆者の旧稿で示してきた1920年代前半までの検討と追究では、主に社会主義関係者・知識層・学識経験者(特に大学の教育・研究者)などによって、マルクス主義が導入され普及されていく諸相を見てきた。それと今回との対比で注意することは以下の点である。1920年代前半までの限りでは、マルクス主義の理論的側面がいかに現実の日本経済下に適用されていくのか、こうした発展的な現実展開また現状分析の側面までは、未だその時期には明確に提示されてはいなかった。しかしこの1920年代の後半になると、状況は完全に違ってきている。例えばかつてのマルクス主義=単なる危険思想という流布され安直な理解への便乗あるいは危惧、あるいは逆に社会主義に「科学性」を持たせたという理解をただ空念仏の如く並べるだけのような類の理解ではなくて、前項(2)で示したように、明らかに手記の各人はマルクス主義・特にマルクス経済学の正確な、そしてまたある程度高度で専門的な理解の上に立ち、さらにそれをもってマルクス主義の普及だけではなくて、この理論を下敷きに、それに即した現状分析がいよいよ示されてきており、そしてその理解把握が広まってきているのである。マルクス主義分析に関するこれらのことを、今日まずわれわれはこの手記を通じて知ることができる。

と言うことは、つまりそうした理解把握、それと同時に、この時期においてマルクス主義・マルクス経済学が理論的な側面に加えて、現実の分析にいよいよ適用されてきたのである。それはさらにマルクス主義・マルクス経済学が優れて有効に当時の現実・社会・経済を分析し、そしてそれらを説明する際に有力な理論となっており、その分析がかなりの説得力を持っていたということまでをも示していると考えられよう。であるからこそ、それはさらに既述のようなマルクス主義の影響力が当時期において増してきていたということ、これと表裏一体をなすわけである。つまりはこの時期、マルクス主義の理論が日本経済の分析において、かような現実的な妥当性を明らかに有していたと考えられるのである。(さらにこうした一面こそが、また「科学的」と言えるものであったと考える。)このような以上の要因が折り重なって複合し、この時期マルクス主義・マルクス経済学が隆

盛を極めていった。それがマルクス主義・マルクス経済学興隆のこの時期重要な要因であった。このように筆者は本稿で提示していきたい。

これに加えて、以上の照射から反照的に明らかになってくる現実、次のとおりである。裏を返せばこの時期においては、前章の各手記に見られたとおり、かなりの程度、資本家や地主の過酷な搾取によって労働者や農民は悲惨な生活下にあり、それに不況や失業が追い打ちをかけ、それによって一般民衆は困窮し苦しみ、貧富の差は大きくなっていった、このような現実である¹²。それはマルクス主義に言わせれば、資本家と労働者との階級対立が高まっていると認識・把握できるのであって、このことはまた結局のところ本節(1)で示したようなマルクス主義の正当性や真理性、あるいは本節(3)で示した現実的な妥当性、そして理論的分析の優位性とも合致するわけである。こうした理論的な面に加えて、さらにこのような現実の社会・経済、これらを接点として、また時代的な要因や背景として、今まで見てきたような1920年代後半にマルクス主義が本節(2)で示した様々な領域において普及し流布し影響力を増していったわけである。その際の重要な要因や要件に関して、本節では上記のように示すことができる。

(4) マルクス主義・マルクス経済学の現実的妥当性 ②

こうした論点に加えて、さらに次の点も重要である。マルクス主義に特有な分析として、弁証法的な論理展開を基に、それを現実の経済分析に適用するような形を採りながら、特には上記3-2の(2)で示したような論理展開とを併せ持ちながら、大枠では資本主義経済内における矛盾の進化、そこでの行き詰まり、そして没落と崩壊、このような論理展開や分析・主張がなされている。これはさらに資本主義の次の来たるべき社会体制として、社会主義社会の建設あるいはそれへの移行、その論理的な下地ともなっていく。例えば前章で示した手記においても、

¹² 1920年代の恐慌・不況を時代的に確認しておくとするれば、1920年に第一次世界大戦後の恐慌、1923年の関東大震災とその後の震災恐慌、1927年の2~3月には金融恐慌が発生、そして1929年の10月に株価の大暴落がアメリカで生じ、日本では1930年1月に金解禁したことと重なって昭和恐慌として世界恐慌が波及してきた。

そうした理解と主張を行なっている者が非常に多くいる。(前章13-2, 14-2, 17-2, 23-2, 25-1・2, 31-2, 36-2, 37-2, 40-2, 41-2, 42-2, 45-2, 50-2, 65-1・2, 69-2, 77-2, 82-2, など.)

こうした論法は繰り返すがマルクス主義に特有なものであり、そうした論法や論理展開からすると、資本主義体制の維持は無理という先行的・潜在的な認識理解と把握、そしてむしろ資本主義体制は変革していかなければならないという必然的・当為的な課題や命題、その後の社会主義体制の建設によって資本主義の矛盾が克服・止揚された発展的な社会が出来上がるという期待、これらを与えながら、それがまた他にはないマルクス主義への魅力ともなっているわけである。こうした主張の当否・是非に関する吟味は、本論での対象課題ではないため、おいておく。ここではマルクス主義がそうした特徴を持っており、当時学生を始めとした大衆はそれに引き付けられた。これがマルクス主義・マルクス経済学興隆の一要因であって、本稿で示した対象課題に対する追加の回答であると理解されたい。

そしてこれを了解された上で、続いて次の因果関係と論点がまた提示できてくる。と言うのは、前項(3)でも言及したとおり、この時期マルクス主義・マルクス経済学が理論的側面に加えて、現実分析に適用され出し、有効に当時の現実・社会・経済を分析し、それらを説明する際に有力な理論となり、引き付けられた者が実際非常に多かったことを示した。ではそこで、マルクス主義・マルクス経済学を基礎的な理論とし、それを実際の日本資本主義に適用させた分析、それも具体的な特徴として上記のような「日本資本主義の矛盾の行き詰まりや没落・崩壊」、これに関して考えていきたい。

まずその出自はどこかであったのかから再考していく。マルクスの『資本論』等々にそうした論理展開の記載がなされるのは周知のこととして、実際にそうした理論的な分析方法を併せ持って、現実の日本経済の矛盾の行き詰まりや崩壊、それらが日本資本主義に適用されてきた研究分析、その初発を再考してみた場合、それは筆者の知る限りでは福本和夫の主張に求められる。

福本和夫という、いわゆる「福本イズム」と、その理論的中軸である「分離＝結合論」が有名である。しかしその彼独自の論理の出自や出発点として、彼自

身による現状認識において、日本の資本主義は世界の資本主義とともに「没落の過程」「行詰」にある、こうした把握がまずもってなされている¹³。そこから彼の論理として、資本主義体制の変革と社会主義建設のために、労働運動の方向転換が必要であり、その方策として分離＝結合論を説いていったわけである¹⁴。こうした福本イズムはこの時期一世を風靡し、燎原の火のように広まったことが知られている。前章の手記にもその様子が示されており、学生やインテリゲンチヤが感化されていることが解る。(前章 76-1.)

「福本イズム」の内容の検討まではともかくとして、本稿の課題との関連で言えば、つまりこのように上記示したマルクス主義に特有な分析が、日本経済に関する現状認識とともに実際現実に適用され出し、それによって学生各人がマルクス主義とその分析に引き付けられていったと言えよう。特に本項では、マルクス主義的な現状認識と分析手法や論法と適合する形で、資本主義経済内における矛盾の進化、世界・日本資本主義の行き詰まりと没落・崩壊、その矛盾解決のためどのようにして労働者階級は纏まり、階級闘争を果していくのかのアジテート、それらを示したのだが、こうした分析や主張が多くのを引き付けていったことが知れよう。そうした様相が本項にても理解・把握できるわけである。1920 年代後

¹³ 例えば、福本(1925) 20 頁、福本(1926) 10 頁。福本和夫に先立つ論客として高橋亀吉の「日本資本主義行詰論」もあるのだが、その後高橋亀吉はその行き詰まりを否定するかの様な意味合いで、「プチ・帝国主義論」を主張していく(高橋〔1927〕)。

¹⁴ こうした現状認識から「福本イズム」を把握すると、日本の無産階級運動の当面の課題に関して言えば、経済的・部分的労働組合運動から革命を目指す全体的な社会主義的な政治運動へと転換を果たさなければならない。そのために無産階級運動の内部に脈打っているマルクス主義的な要素だけを、理論闘争を通じて他の雑多な無産階級運動の要素からそれをまず分離すること、そしてそれを前衛組織にまで高めていく必要がある。こうしたいったん分離の上で、それを無産階級の大衆運動と再度結合して行くことが必要で、この「分離＝結合論」が無産階級運動の当面で課題であるとした。(以上、上記注 13 の福本の論文の他に、長岡〔1984〕16 頁を参考にした。)

ただ、福本和夫の現状認識に関して、簡単に「日本資本主義急激没落論」(長岡〔1984〕16, 44 頁)と単純に表現してしまうと、福本自身からはかなり異論があるようである。この点の詳細は、福本(1977) 101, 107 頁における福本自身の主張を参照。

半のマルクス主義・マルクス経済学興隆の要因、そのさらなる一旦は、本節(1)～(3)で示した点をベースにして、そしてさらにそれが具体的に援用展開され出した本項(4)の状況からも認識・把握できる。

さて福本イズムのその後を辿れば、福本イズムそのものは日本共産党の1927年テーゼによって山川均の「山川イズム」と共に否定され、しかしそれに代わるかのように、上記日本資本主義の没落に関しては、1927年6月から始まった高橋亀吉・猪俣津南雄・野呂栄太郎の『『プチ・帝国主義』論争』にて俎上に乗って議論されていった。これにやがて「日本資本主義論争」へとつながっていくわけである¹⁵。

これらの論争の経緯と内容の詳解は他の文献(長岡[1984]など)に譲るとして、また本稿での課題との関連では、このように論争あるいは研究が以前との関わりで、つまりは日本資本主義の分析がマルク主義・マルクス経済学的な分析手法をもって進展していく中で、本節で示してきたマルクス主義・マルクス経済学の理論、分析の有効性と現実的な妥当性、これらがさらに試され、検証されていったと再度言えるわけである。そのプロセスにおいてまた、マルクス主義・マルクス経済学がこの時期に隆盛していく要素があったわけであり、同時にそれらによって学生他の各人はマルクス主義・マルクス経済学に魅力を感じ、引き付けられていくことともなった。総合的にこのように認識・把握でき、提示できるのである。

4. 残された課題 むすびにかえて

本稿で対象とした課題の検討は上記の3で詳しく示してきたので、以下紙幅の許す限りで、本稿で扱いきれなかった対象について触れながら、本稿を閉じていくこととしたい。

学生たちは当時以上の状況と要因からマルクス主義・マルクス経済学に引かれ、そして2で示した者は実践活動へと進んでいき、現実にもその後官権に捕らわれ、

¹⁵ 長岡(1984)21, 25, 109頁。

かような手記を残したわけである。その手記の一・二の項目について本稿では取り上げて検討してきたのであるが、その他の三～六の項目（本稿 42 頁参照）については未紹介である。いずれ三～六に関しても紹介し検討していくことが、筆者の今後の課題となっている。

その予告編がてら、手記内容のいくつかを示すと、マルクス主義を依然正しいと思う者・再考をする者、マルクス主義の研究を続ける者・止める者、実践活動から手を引く者・そうでない者、当時の日本共産党の活動について、それぞれの思いは実に様々である。これらを貫く一本の線や共通なものがあれば、本稿のように導き出したいと考えている。あるいは対象を絞って、上記マルクス主義を依然正しいと思う者・再考をする者だけに限って、両者それぞれの共通要因を探り出すことが可能かとも考えられる。いずれにせよ、これらが本稿では扱いきれなかった今後の課題対象として残された次第である。

【参考文献】

- 新興出版社編集部 (1991) 『『官側史料』のことについて』（『左傾学生生徒の手記』第三輯，新興出版社，1991 年復刻版，所収）。
- 高橋亀吉 (1927) 「日本資本主義の帝国主義的地位」『太陽』1927 年 4 月号。
- 土屋基規 (1991) 「解説」（『左傾学生生徒の手記』第三輯，新興出版社，1991 年復刻版，所収）。
- 長岡新吉 (1984) 『日本資本主義の群像』ミネルヴァ書房。
- 深澤竜人 (2018) 「マルクス経済学（マルクス主義）導入時の検討——日本マルクス経済学史 I——」『山梨学院生涯学習センター紀要』第 22 号。
- (2019a) 「河上肇のマルクス経済学への転身に関して——日本マルクス経済学史 II——」『山梨学院大学経営情報学論集』第 25 号。
- (2019b) 「大正デモクラシー期におけるマルクス経済学の興隆に関して——日本マルクス経済学史 III——」『山梨学院生涯学習センター紀要』第 23 号。
- (2020a) 「労働価値説の再考——1920 年代の価値論争を題材にして——」『山梨学院大学経営学論集』第 1 号。
- (2020b) 「1920 年代後半の価値論争の再考」『明治大学教職課程年報』No. 42。
- (2020c) 「労働価値説と地代に関して」『山梨学院生涯学習センター紀要』第 24

号.

福本和夫(1925)『『方向転換』と『資本の現実的運動』』『マルクス主義』第16号,
1925年8月号.

——(1926)「労農政党と労働組合」『マルクス主義』第21号,1926年1月号.

——(1977)『革命思想』第一部,インタープレス.

文部省学生部・思想局(1934-1935)『左傾学生生徒の手記』第一〜三輯(1991年に新
興出版社より復刻版).

「二二年テーゼ」(山辺健太郎解説〔1964〕『社会主義運動1』「現代史料」14,みすず
書房,所収).

「日本問題に関する決議(一九二七,いわゆる二七年テーゼ)」(同上).